

なぜファシズムはフランスで失敗したのか

竹岡敬温

両大戦間のドイツやイタリアではファシズムが政権を掌握しましたが、この時期のフランスも、ファシズムのウイルスにたいして免疫をもっていたわけではありませんでした。けれども、イタリアやドイツとは違って、フランスでは、ファシズムは政権を取ることができませんでした。ファシズムの運動が失敗した場合も、それが成功した場合と同様に、どのような条件がファシズムの定着を許したのかをわれわれに教えてくれるようにおもいます。フランスは、その理想的なケースになりましょう。

多くの人びとによってフランスはフランス革命の国であり、自由と人権の国だとおもわれていますが、王党派の、

あるいは権威主義体制を支持する多数のフランス人は、議会制民主主義の共和制が「偉大な国家」にふさわしくないと考えていたのです。両大戦間にフランス第三共和制が社会主義革命の脅威、世界恐慌の波及と長引く不況、ドイツの領土拡張主義の威嚇などの困難に立ち向かうことができなかったとき、フランス国民の不満は完全な政治不信に変わったのです。

この時期のフランスでは、選挙での左翼の勝利に反発して、極右の運動が支持者を増やしました。一九二四年、「左翼連合」とよばれた中道派と左翼の連合が国会議員選挙に勝ったとき、ジョルジュ・ヴァロワ（一九一一年にナ

シヨナリストの労働者たちを結集しようとしたブルードン・サークルの創始者)が、ムツソリーニの運動からその名称と方法を借りて、フェソー団を結成し、シャンパーニュ地方の実力者ピエール・テタンジェが、フェソー団にくらべるともっと伝統的なシヨナリズムに基礎を置いた組織でしたが、愛国青年同盟を設立しました。

一九三〇年代、恐慌の影響がしだいに拡大し、ナチス・ドイツが一九一八年のヴェルサイユ条約を事実上反古にし、国内ではスタヴィスキ事件などの政治的スキャンダルの増殖が第三共和制のイメージをけがしたとき、ふたたびさまざまな種類の急進的な「極右同盟」の運動が盛んになりました。一九三四年二月六日に下院を取り巻いた大規模なデモは一五人の死者と多数の負傷者を出しましたが、下院で信任をえていた急進党主導のグラディエ内閣を総辞職に追い込んだこのデモは、極右同盟の力が政府を倒壊させるほど強力であったことを証明するものです。しかし、共和制を倒し、専制的な政治体制を打ち立てるほど強力ではありませんでした。

二月六日の流血デモ事件に続いた左右勢力の対立激化の時代に、フランスの有権者の大多数が選んだのは左翼政権

でした。社会党・急進党・共産党によって構成された左翼連合、人民戦線が一九三六年五月の選挙に勝利し、社会党党首のレオン・ブルムが首相となつて、一九三六年六月に軍隊式組織の極右同盟を解散させました。しかし、共産党に支持された内閣の首相の座をユダヤ人が占めたという事実は、極右の激高を絶頂にまで高めました。

一九三〇年代フランスの極右運動の重要性については、激しい論争の主題になっていきます。ルネ・レモンをはじめ、フランスの現代政治家たちの多くは、フランスには土着のファシズムはなく、フランスの「ファシズム」は、極右の漆喰のはげかかった外面に「ローマ風漆喰」を塗りつけた、外国の例からの模倣でしかなかったと主張しました。これとは反対に、イスラエルの歴史家ゼーフ・ステルネルやアメリカの歴史家ロバート・サウシーらは、フランスこそ「ファシズムの紛れもない発祥地」であると主張しました。

威圧的で騒々しい極右同盟の運動と、一九四〇年六月、軍事的敗北のあととはいえ、フランスでは議会制民主主義がかんたんに崩壊してしまった事実をみて、ゼーフ・ステルネルは、ファシズムが当時のフランスの政治社会の人の

との言語や態度のなかに浸透していたと結論しました。そして、ステルネルは、一九三〇年代フランスの民主主義の機能不全に向けられたあらゆる種類の批判を「ファシズム」として分類し、それらの批判をおこなった広範囲の論者たちを「ファシスト」として分類しました。これにたいして、フランスの歴史家たちの多くといくにんかの外国の歴史家たちは、ステルネルの「ファシズム」のレッテルはあまりにも多くの種類の運動を一括して、かれの結論は行き過ぎであると考えています。

フランスにおけるファシズムの問題を考えるには、一見ファシスト的な言語で語ったフランスの知識人や、一九三〇年代のフランスで仰々しい示威運動をおこなった極右小集団を列挙するだけでは満足できません。

フランス・ファシズムの問題の重要な鍵であり、論争のかなめになるとおもわれるのは、一九三〇年代フランスの最大の極右同盟であった火の十字架団です。火の十字架団は、フランソワ・ド・ラ・ロック指導の下、一九三六年六月にはおよそ四五万人の団員を擁し、議論の余地ない大衆運動になっていました。もし火の十字架団の運動がファシズムであったならば、一九三〇年代のフランスでは、ファ

シズムは、少数の知識人たちの関心事にとどまることなく、強力な組織に成長していたということになりましょう。逆に、もし火の十字架団の運動がファシズムでなかったならば、フランスのファシズムは周辺のなものとしてとどまったということになりましょう。

ド・ラ・ロックは、一九三一年に火の十字架団の委員長になり、それまで戦場での英雄的行為にたいして戦功十字章（すなわち火の十字架）を授けられた人びとだけにメンバーを限っていた小さな在郷軍人団体の組織を拡大し、それを政治運動に変えました。

火の十字架団は、国会の無力と腐敗を告発して多数の加盟者を引き寄せ、ボルシェヴィズムの脅威を振りかざし、労資協調主義（コーポラティズム）——ド・ラ・ロックは「労資協調主義（コーポラティズム）」という語より「組織された職業」という語を好みました——を基礎とする社会秩序の建設と調停者としての国家の権威強化を主張しました。このような主張は、当時のフランスの政治的風景の一部を占めていた「国民的結合」あるいは「第三の道」のイデオロギーのなかにもみいだされるものでしたが、しかし、それはファシズムのプログラムのなかにもみいだされ

る主張でした。

火の十字架団のなかには「ドイツポ」とよばれた民兵組織に似た突撃隊が軍隊式に編成され、共産主義者の反乱とたたかうための訓練という名目で、指導者の命令によって定期的に集められた団員たちのデモは、あきらかに全体主義のパレードをおもわせました。その威嚇的な運動を目的あたりにして、ファシズムの台頭を懸念していた同時代のフランス人がその関心を火の十字架団に集中させたのは不思議ではなく、このような火の十字架団の軍隊式組織と行動には、ファシズムの影響をみないわけにはいきません。団員たちに厳格な規律を守り、早まった行動をしないよう説くド・ラ・ロックは、一方で、「腐敗した」政権と議会への攻撃を開始する「決行の時」は近いと告げて、街頭運動に団員たちを動員しようとしました。

当時のフランスの左翼は火の十字架団を「ファシスト」呼ばわりしました。「ファシスト」という印象は、一九三四年二月六日夜、火の十字架団が他の極右同盟とともに下院攻撃のデモに参加したときいっそう強まりましたが、しかしながら、当夜、他の極右同盟のデモ隊が下院への通路を遮断する警察機動隊と衝突し、多くの死傷者を出したの

にたいして、ド・ラ・ロックはかれのデモ隊を他のデモ隊に合流させず、下院裏の街路で行進と背面行進を繰り返させるだけで、共和国バリ衛兵隊の手薄な非常線を突破させようとはしませんでした。また、フランスの右翼としては異例ですが、ド・ラ・ロックは反ユダヤ主義を拒否し、愛国的なユダヤ人を団員として迎えました（しかしながら、火の十字架団のアルザス支部とアルジェリア支部だけは、反ユダヤ主義の態度をとりつづけました）。かれはまた、ナチズムを厳しく批判しました。

火の十字架団がファシストか否かについては、歴史家たちのあいだで大きく意見が分かれています。火の十字架団の主張のすくなからぬ部分がファシズムのプログラムにみいだされるものであったとしても、そこにはファシズム——とくにナチズム——との不一致点も多く、その不一致点には基本的性格にかかわるものであり、一概に火の十字架団を「ファシスト」であったというのはむしろかしいとおもわれますが、しかし、一九三〇年代ヨーロッパの「ファシズムの磁場」のなかで、火の十字架団——とくに、その行動様式——にたいしてファシズムが及ぼした影響を否定することはできません。

一九三六年六月の人民戦線政府による極右同盟の解散は、ド・ラ・ロックに合法的政治行動への道を開き、かれは、火の十字架団に代えて、議会政党、フランス社会党（PSF）を結成しました。フランス社会党（PSF）は、強力な、しかし選挙によって選ばれた指導者ド・ラ・ロックの下で、「ディスポ」の組織を変え、軍隊式デモをやめ、国民的和解と社会正義を強調しました。

第二次大戦前夜には、フランス社会党（PSF）は一五〇万人から二〇〇万人の党員を擁するフランス最大の政党となっていました。もし一九四〇年に国会議員選挙があったならば、フランス社会党（PSF）は一〇〇人近くの議員を国会に送ることができると期待されましたが、戦争がその希望を無に帰しました。興味深い事実は、ド・ラ・ロックの運動組織がその支持者をもっとも急速に増加させることができたのは、一九三六年七月以後、それが共和制に同意し、議会制民主主義を尊重する穏健派の政党になろうとしたときであったということです。

一九三八—一九三九年、ダラディエを首班とする中道・左翼内閣の下で、フランス社会がやや静穏を取り戻し、経済が立ち直りの気配をみせたとき、すべての極右の組織

は、そのうちのもっとも穏健な組織、フランス社会党（PSF）を除いて、地歩を失いました。一九四〇年の敗戦のあと、ヴィシー対独協力政権を運営したのは、極右ではなく、伝統的右翼でした。フランス極右の残党たちは、一九四〇—一九四四年、占領下のパリでナチスの金で浮かれ騒ぎ、信用を失墜させました。フランス解放後の一九四五年には、極右はごく小さなセクトになっていました。

フランスにおけるファシズムの挫折の原因を考えようとするとき、共和主義の伝統の力を強調しないわけにはいきませんが、だからといって、ファシズムがこの国で成功しなかったのは、一部のフランスの歴史家が主張するように、フランスの社会がファシズムにたいしてアレルギーをもっていただけではありません。ヨーロッパでは、この時代、ファシズムの誘惑からまぬがれた国はありませんでした。それどころか、フランスは、もっとも過剰で、もっとも華麗な、ファシズムないしファシズムに近い知的表現——セリーヌ、ドリユ・ラ・ロシエル、ブラジャック、バルデーシュ、ルバテなどの評論や小説を想い起こして下さい——を生み出した国でした。

一九三〇年代にフランスを襲った恐慌は、深刻な政治危

機の原因になりましたが、しかし、ドイツのように、フランス社会全体の崩壊を引き起こすまでにはいたりませんでした。フランス第三共和制は、いくたびか彷徨を重ねながらも、出口のない袋小路や完全な機能停止におちいることはありませんでした。保守派は、左翼が政権を掌握した一九三〇年代にも、ファシストたちに助けを求めるほどには脅威を感じませんでした。一方、極右同盟の指導者たちは、反共和制運動を成功させるために、ムツソリーニやヒトラーが取引したように、保守派との一種の妥協を結ぶということよりも、それぞれの教義の「純粋さ」をかたくな
に守ろうとして、だれも極右勢力全体を結集できる統合者になることに成功しませんでした。

なぜファシズムはフランスで成功しなかったのかという疑問にたいしては、当時のフランス農村で展開された反政府運動、ドルジュール運動が多くなことを教えてくれるようにおもいます。両大戦間フランスの農民社会の主要な右翼のアジテーター、アンリ・ドルジュールは、フランス北西部の農村で、緑色のシャツの制服を着用した軍隊式組織、農民青年隊を結成しましたが、この農民組織は、社会保険制度への強制加入や小麦価格の暴落にたいする政府の

無策にいらだった農民たちを直接行動にかり立てるのに成功しました。しかしながら、ドルジュール運動は、堅固で持続的な運動組織をつくりあげることには成功せず、また、フランス北西部を越えて全国的に拡大するまでにはいたりませんでした。イタリアやドイツのファシズムが両国の社会に根を下ろしはじめたのは農民のあいだからであったことをおもえば、フランス農村における反政府・反共和制運動の研究はきわめて重要だと考えられましょう。それに、当時、まだ、農村の比重がひじょうに大きかったフランス社会では、ファシズムの成功の可能性は、かなりの程度、農村の征服如何にかかっていたのではないかとおもわれます。

一九三〇年代、フランス農村部にはファシズムに生息場所をあたえる空間が広がっていました。政府も伝統的な農民組織も、農産物価格の崩落を前にしてまったく無力で、信用を失っていました。

緑シャツ隊の指導者で、フランス農民の嘆きと怒りをよく共感し、それを言葉に移し替える一種の天賦の才をもっていた農業新聞のジャーナリスト、アンリ・ドルジュールは、市場の立つ日ごとにおこなった演説を通して、農民た

ちの怒りをかき立てました。一九三三—一九三四年には、かれは公然とイタリアのファシズムを褒めそやし、緑色のシャツ、扇動的スピーチ、外国人嫌いと反ユダヤ主義など、ファシズム特有の主張と戦術を採用しました。かれの運動は、その絶頂期には、フランス農村部の諸都市でかつてみられなかったほど多数の群衆を寄せ集める力がありました。

一九三六年と一九三七年の夏、フランス北部平野の大農経営に雇用された農業労働者たちの大規模なストライキが、地主たちのあいだに広範なパニックを引き起こしたときには、ドルジュールは、農作物の取り入れをおこない、ストライキをつぶすために、遊撃隊を派遣しました。

しかしながら、ドルジュールの遊撃収獲隊の直接行動は、ほとんどなんの役にも立ちませんでした。この小集団は、一九二〇年代のイタリアで農村部の社会党組織、労働組合事務所、活動家たちを「懲罰遠征」と称して襲撃したムツソリーニの「スクワドロ（武装行動隊）」とよく似ていました。しかし、フランス農村地方の現実的な力になることはありませんでした。フランスでは政府がイタリア政府よりはるかに強力に事態に介入して、収穫にたいする脅

威を取り除いたからです。当時の政府が人民戦線政府であつたにもかかわらず、左翼政権は、都市への食糧供給を優先的に考え、農業労働者が収穫時にストライキを始めるたびに、憲兵隊を農村に派遣したのでした。このため、フランスの農民は、ポー川流域のイタリア農民ほどに、国家から見捨てられたという不安をいだくことはありませんでした。

さらに、一九三〇年代をつうじて、フランス農村では保守派の農民組合が力をもち、緑シャツ隊が怒りのはげ口しか提供できなかったのにたいして、農民組合は、効率的な協同組合の組織をつうじて、農民にとつて不可欠なサービスを提供しました。緑シャツ隊は、結局、そのような活動の外に置かれました。一度はドルジュールを支持し、かれがその集會に農民大衆を集めるのを手助けした全国農業経営者連合の委員長ジャック・ル・ロワ・ラデュリーが、一九三七年に、ドルジュールの非合法活動に頼るよりは、国家行政に内部から影響を及ぼすことのできる強力な農民圧力団体を動かすほうが賢明だと決意したとき、ドルジュールにとつて、決定的な危機が訪れました。全国農業経営者連合や協同組合運動などの、農村に深く根を張った

保守派農民組合の力はそれほど大きく、もはや緑シャツ隊に活動の場所はほとんど残されていませんでした。

ドルジエール運動が「完全なファシズム」になれなかつたもうひとつの重要な弱点は、ドルジエールが都市の中産階級の不幸を取り込むことができなかつたことでした。基本的に農村のアジテーターであつたドルジエールは、都市の商人たちを農村文明の敵の一員とみなす傾向があり、これらをファシズムのなかの潜在的な同盟者と考えるようとはしませんでした。

また、ドルジエール運動を挫折させた理由のひとつは、フランス農村の多くの地方では左翼の政治勢力がつよく根を張っていたことであり、それらの地域の農民たちはドルジエール運動を受け入れようとはしませんでした。地中海沿岸の南フランスの大部分には一九世紀初頭以来、共和主義が広がり、ラングドックのぶどう栽培地域は一九世紀末には急進党か社会党を支持するようになり、一九三〇年代の恐慌のときには、古くから共和主義を支持するようになつていた地域のフランス農民たちは、左翼に助けを求めようとしたのでした。

この結果、一九三〇年代の恐慌が農民のあいだに引き起

こした大きな苦悩にもかかわらず、フランス農村は強力なファシズムを出現させる環境とはならなかつたのです。

火の十字架団の場合は、どうだつたでしょう。おそらく、似たようなことがいえましよう。一九三五年六月のアルジェでの集会で、ド・ラ・ロックは、きわめて短い時間のうちに、フランス人のフランスを打ち立てるための攻撃の決意を伝えるためにやつてきたと明言し、その二週間後、火の十字架団北アフリカ支部執行委員会のひとりとは、楽しんでいるときはもはや過ぎ去り、「決行の時」が夏から一九三五年最後の四半期までにやつてくるだろうとスピーチしました。六月十三日には、メッツの集会で、ド・ラ・ロックは、現在の議会制度は終わりに近づいているとのべ、一〇月か十一月に「決行の時」が訪れ、そのときには、火の十字架団が政権を握り、国を組織し直すであろうと予言しました。ド・ラ・ロックは、火の十字架団が政権を奪取した場合に組閣される内閣の重要閣僚や警察のトップのポストに据える人物をすでに選んでいました。

しかし、夏が過ぎ、秋も過ぎ、冬が訪れても、火の十字架団によるクーデタのかすかな気配もありませんでした。

「決行の時」が近いことを告げた演説にもかかわらず、

ド・ラ・ロックは、それを行動に移す命令を出そうとはしませんでした。ゼーフ・ステルネルの表現によれば、「攻撃の時」をほのめかしながらも、火の十字架団の首領は、自分の部隊を難攻不落の砦の攻撃に差し向けようとはしない慎重で老練な軍人のようでした。ド・ラ・ロックは、クーデタが成功するには、民衆の支持と軍隊の支援が欠けていることが分かっていたのです。共産党や社会党だけでなく、急進党の大部分の黨員たちのあいだにも、反ファシズムの感情が広がり、多くのフランス人が人民戦線の形成に現状打開の希望を託すようになっていた一九三五年秋の政治的、社会的状況が、かれの戦術を行動に移すのに不利だと判断したのです。結局、ド・ラ・ロックはルビコン川を渡ろうとはしなかったのです。

レオン・ブルムの率いる人民戦線政府の実験が挫折したとき、フランスはファシズムにたいしてこれまでになく好都合な環境を提供したはずでしたが、しかし、この間も第三共和制は完全な機能麻痺におちいることなく、また、そのときにはすでに火の十字架団は複数政党制を認める議会政党、フランス社会党(P.S.F.)に生まれ変わっていて、人民戦線最後の内閣であるダラディエ内閣の下で共和

制があらたな息を吹き返したとき、フランス社会党(P.S.F.)は、共和制の制度と議会民主主義を尊重し、総選挙の早期実施を要求する大衆政党になっていました。

これらのことは、ファシズムという闖入者がフランスの政治システムのなかで幅をきかせるようになるのが、どのようなに困難であったかを理解させます。ナチスという新しい到来者がフランスにファシズムの居場所をみいだすというチャンスに恵まれるのは、第二次大戦勃発後、一九四〇年の軍事的敗北によってフランスの国家と既存の制度が完全に機能しなくなったときにすぎませんでした。

(たけおか ゆきはる・大阪学院大学教授、大阪大学名誉教授)